

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒 607-8175 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

3 月 例 会 行 わ れ る !

去る 3 月 6 日 京大会館で行われました大図研京都支部 3 月例会は 20 名をを越える参加者を得ました。当日の会場の写真は「ML ゆりかもめ」の下記 URL でご覧下さい。

「ユーザーから見た大学図書館のサービス」

<http://kuee2.kuee.kyoto-u.ac.jp/~djdonkai/dtkk/19990306.html>

演題は当初「アジア太平洋時代と図書館」というタイトルでしたが、出来るだけ身近な問題からということで講師の堀田先生にお願いし、「ユーザーから見た大学図書館のサービス」ということで講演が行われました。

例会のレジメ、感想文等は 4 月号に掲載します。ご期待下さい。

~~~~~

### 大学図書館問題研究会 30 周年記念 支部報復刻版（製本）の発刊について お知らせとお願い

~~~~~

大図研 30 周年を記念して、京都支部報復刻版を作成し、10 月中に会員のみなさんに配布したいと考えています。復刻される支部報は創刊号 (No 1) ~ No 150 号とします。会員のみなさんに欠号補充をお願いしたところ早速ご提供をいただきありがとうございます。

「大図研 京都支部報」No 欠号 (1999/03/15現在)

巻号	発行日	現物様態	現物要否	巻号	発行日	現物様態	現物要否
4	1979/10/15	なし	要	20	1982/05/01	なし	要
7	1980/	なし	要	21	1982/06/25	なし	要
15	1981/10/	なし	要	32	1984/06/01	なし	要
19	1982/04/02	なし	要	33	1984/07/01	なし	要

しかし、なお上記一覧表にあります支部報が欠号状態です。該当支部報をお持ちの方がいましたら、是非ご寄贈又は貸し出しをお願いします。連絡は最寄りの支部委員又は編集責任者田北までお願いします。

みなさんの協力で「支部報復刻版」を完成させて、大図研京都支部の活動と歴史を伝えましょう。

目次	3 月例会行われる..... 1 頁
	支部報復刻版（製本）について..... 1 頁
	阪神大震災記録保存運動の経験から学ぶもの..... 2 頁
	私のインターネット活用術（2）..... 4 頁
	数珠つなぎ（36）..... 6 頁
ご意見・ご要望、投稿はメール、又は FAX で 編集気付 (kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで	

阪神大震災記録保存運動の経験から学ぶもの



大館和郎

あの阪神・淡路大震災からすでに4年が経過して、マスコミの関心もしだいにうすれつつある現在、当時の記録を後世に伝えるべく、様々なグループ、人々が地道に活動している。兵庫支部主催の1月23日(土)に開催された近畿4支部合同例会「震災をどう記録/記憶し続けるか」に出席してそうした動きの一端に触れることができた。今回は「震災文庫」を中心とした活動を、神戸大学附属図書館の稲葉洋子氏によって、また「震災・まちのアーカイブ」の活動を、会員である寺田匡宏氏によって報告していただいた。

神戸大学図書館は震災直後からすばやい動きを見せた。震災情報に関する問い合わせが寄せられたことがきっかけで、1995年4月には「震災文庫」を設立する方針を立て、震災に関する一切の資料を可能な限り網羅的に収集し、保存し、被災地の復興、今後の防災対策の策定、地震研究に役立てるために一般公開にむけて準備を始めている。6月には資料恵贈の館長からのお願いの文書を学内のみならず、多くの関係機関に発送するなど資料収集作業が開始された。そして1995年10月に一般公開を始めた。こうした活動の中核を担ったのは稲葉氏をはじめとする少数の職員で通常業務と平行して行われたボランティア的な努力の賜物である。

震災資料として収集されているものは、書籍、写真、ビデオテープ、カセットテープ、スライド、CD-ROM、地図、ポスター、ノート、チラシなどありとあらゆる種類のものがある。通常の図書館資料の枠組みからはみ出すものもあり、知恵をしばりいろいろ工夫しても整理できないものも多い。レジュメ、パンフレット等、厚みのない資料はカバー表紙をつけて背にタイトルを貼る。チラシ等、一枚もの資料は硬質のカードケースに入れてラベルを貼り、サイズ別のキャビネットに配列する。大型資料は特別な保存機器を使ってポリエステル・フィルムの間に挟み、周囲を超音波で密封する。写真資料はデジタル化する等。

データの作成の段階で問題になるのは、チラシやポスターのタイトルなどの書誌事項をどうするのかといった事柄である。作った時点では、資料として保存されることなど夢にも考えなかったわけだから、伝達したい情報だけを強調して作られることが多い。その少ない情報からタイトルや出版者になる語句を選びだして書誌を作成するので、利用者が考えたものと異なる資料が検索結果として出てくることがある。そこで検索するときの参考情報として画像を提供することになった。タイトルといっしょにチラシやポスターの絵がコンピュータの画面で見ることができるので、資料の状態や内容がひとめで把握できる。

しかしインターネットで画像を提供するためには、一枚もの資料の著作権者の許可を得る

必要がある。まず著作権者がだれか調査しなければならない。資料に手がかりがない場合もある。また著作権者として見つけた人から「リストの中にあるチラシは覚えがない」という連絡があったりする。手書きの資料などの場合、「字がうまくないので」と言って公開に消極的だったりして、非常に手間のかかる作業であるが、根気よく続けることによって、資料提供が増えていったという。

「震災文庫」では震災資料を収集している阪神間の図書館や史料館のデータの提供を受けて公開しているが、震災資料の収集・保存に関してはネットワークをこれから拡大していくことが重要だと思った。

神戸大学附属図書館が国立大学というアカデミックな制度の枠内で、可能なかぎり活動しているとすれば、民間ボランティア組織「震災・まちのアーカイブ」は草の根の立場から、震災を体験したまちの中で、避難所や仮設住宅の物質記録やチラシなどの資料を保存するほか、体験談の聞き取りをしている。その事務所は被害の大きかった神戸市長田区にある。アーカイブとは(1)資料・史料そのもの(2)文書館という意味を持つ。

資料は、震災の記憶を大切に育み伝えていきたいと望む人々自身の手で保存されるのがふさわしいとして、「現地保存」を基本としている。避難所での人と人とのつながりがきっかけとなり、喫茶店が資料の保管場所となったり、被災者宅での保存が可能なら、保存先の台帳をつくり、資料そのものは個人宅や残せる施設で保存する方針を持っている。このような資料の保存のあり方は図書館のように資料を一箇所に集中して保管するあり方とは対照的だ。分担収集もあるが、予算の不足や保管スペースの狭さからくるもので、積極的な目的のためではない。被災資料は被災者の記憶と密接に結びついているため、被災者自身に語ってもらうのがいいのかも知れない。その被災者や家族など直接の関係者がこの世からいなくなった時点で、はじめて資料館や博物館の資料としておさまるのかもしれない。旧家の土蔵などに埋もれている古文書のたどる運命と似ている。

震災資料の保存活動の報告という今回の発表から、もちろん震災という非日常的な出来事に直面した人々の暮らしの激変と復興過程を記録し、伝えたいという思いが感じ取れたが、そういう特定のテーマを越えて、資料の収集・整理・保存に関する貴重な経験が蓄積されつつあるという印象を持った。ノート、手帳、はがき、メモといった様々な資料を整理する過程でとまどうことも多い。マニュアルなどに頼っては処理できない作業もあるわけで、そこは個人の創意工夫がものを言う。既成の目録法や分類法では対応できない場合にこそ、目録や分類のより深く柔軟なとらえ方が要求されるし、これはどの分野でも同じことと思うが、習慣になった考え方をちょっとわきにおいてみて、発想を変えてみるということの必要性を具体的に示してくれたよい機会だった。

神戸大学附属図書館「震災文庫」 <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb>

「震災・まちのアーカイブ」

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金属(株)内

Tel 078-681-6231 Fax 078-681-6232

(おおだて かずお 京都学園大学図書館)



私のインターネット活用術 (2)

出張・旅行 (国内) 編

呑海 沙織

いつのまにやらインターネットは、私の日常にすっかりくいこんでいます。5年前までは、ほとんど縁のなかった、ftp, TELNET, そしてとりわけ、e-mail, WWWは、なくてはならない存在になっています。特に、弱点を補ってくれるものは手放すことができません。私の弱点、それは「時刻表」です。出張先が決まると、パソコンの前に座り、私は次のような行動をおこします。

① 訪問機関の最寄の駅を探す

最近では、たいていの公的機関はホームページを公開しています。そして、そこには住所や最寄の駅、地図などの情報が記載されています。訪問機関が大学の場合は、〈全国大学一覧〉(1)を参照します。どこからリンクをたどればよいのかわからない機関の場合は、サーチエンジン〈goo〉(2)で、機関名をキーワードとして検索します。その機関のホームページから、周辺の地図を人手できない場合は、〈Mapion〉(3)で調べます。

② 交通手段を決める

訪問機関の住所や最寄の駅がわかったら、交通手段を決定します。〈乗換案内〉(4)の登場です。出発駅と目的駅を指定するだけで、経路を調べることができます。試しに出発駅に京都を、目的駅に、昨年大図研全国大会が開催された長岡をいれて検索してみましょう。すぐに4つの経路が示されます。

No.1 4時間22分 784.2km 20,790円
新幹線のぞみ 135分 10500円 指 6210円 京都～東京 513.6km (乗換 8分)
上越新幹線 99分 指 4080円 東京～長岡 270.6km

No.2 4時間44分 784.2km 19,820円
東海道・山陽新幹線 157分 10500円 指 5240円 京都～東京513.6km(乗換 8分)
上越新幹線 99分 指 4080円 東京～長岡 270.6km

No.3 5時間12分 475.1km 10,690円
雷鳥 302分 7350円 指 3340円 京都～長岡 475.1km

No.4 5時間17分 475.1km 10,690円
白鳥 307分 7350円 指 3340円 京都～長岡 475.1km

所要時間・距離・運賃を瞬時に調べることができます。時刻表の苦手な私にとって、このサービスは感涙ものです。経路がわかれば後は、〈時刻表リンク〉(5)で時刻を調べます。

③ 宿泊先を決める

〈やど上手〉(6)や〈宿泊辞典〉(7)、〈ホテル〉(8)など、宿泊施設に関するホームページはたくさんあります。中でも私のお気に入りには、〈ホテルの窓口〉(9)です。空室を検索して、その場で予約できるサービスはもちろんのこと、そのホテルの情報が詳しいのが特徴です。周辺地図、客室やホテル周辺の写真、料金、サービス内容等を確認することができます。私が最も気に入っている理由のひとつに、「会員からの情報」があります。ホテルに実際に泊まった人が、そのホテルについて書いているので、とても参考になります。「本当に駅から近かった」「窓から見た景色がとても良かった」「接客サービスがよかった」という情報から、「部屋が煙草くさかった」「朝食は期待してはだめ」「冷蔵庫がないのが不満」といった情報まで寄せられています。このサービスを使って、あるホテルを利用したときに、「大きなコンビニが近くにあって便利」と書かれていたのですが、実際そのホテルの近くにそれらしきコンビニを見つけたときは、思わず笑ってしまいました。はじめてこのサービスを利用したときは、本当に予約されているか少しどきどきしたのですが、今のところ、そのようなトラブルはありません。宿泊予約の確認とキャンセルや変更が手軽にできるのも、魅力のひとつです。

そして、それから私は席を立ち、チケットを買いに行くことになります。

椅子に座ったままで、しかも無料でこれらのサービスを受けることができるのは、驚くべきことだと思います。面白そうなリンクをたどって行って、現実の世界に帰れなくなり、時間を忘れることになりがちですが、上手な使い方をすればかなり時間を節約することができます。ちなみに、上記の「乗換案内」は試用版ですが、商品を購入すれば、各駅時刻表機能やJR・航空会社への直接チケット予約リンク機能がついているので、まさしく椅子からまったく立たずに準備ができてしまいます。

ここでご紹介したホームページはいずれも、いろんな雑誌で紹介されたものばかりです。〈京都大学工学研究科・工学部電気系図書室〉(10)からもたどれますので、こちらもぜひご利用下さい。

- (1) 全国大学一覧 <http://www.otemae.ac.jp/list-u/index-j.html>
- (2) goo <http://www.goo.ne.jp/>
- (3) Mapion <http://map.toppan.co.jp/>
- (4) 乗換案内 <http://www.jorudan.co.jp/>
- (5) 時刻表リンク <http://www.jikoku.com/index.html>
- (6) やど上手 <http://www.yadojozu.ne.jp/>
- (7) 宿泊辞典 <http://www.teleway.ne.jp/~yonta/>
- (8) ホテル <http://www.ntt-v.or.jp/>
- (9) ホテルの窓口 <http://hotel.aska.or.jp/>
- (10) 京都大学工学研究科・工学部電気系図書室 <http://www.kuee.kyoto-u.ac.jp/library/>

(どんかい さおり 京都大学工学研究科・工学部電気系図書室)

お詫び



(1) 今回編集責任者の個人的事情で発行が遅れてしまったこととお詫び申し上げます。

(2) 連載小説「リュウ」は紙面の都合などで今回のみ、お休みさせていただきます。

次号からまたご愛読下さい。

● — ● — ● ● ● — ● ● — ● — ● ● ● — ● ● ● ● — ● — ● ● — ● — ● ● ● ● — ●

！ 戦慄の連載コーナー!!

● 京都大学・図書館OB

さかい ただし

● 大図研京都数珠つなぎ 第36回

酒井 忠志 さん

● — ● ● ● — ● ● — ● — ● ● ● — ● ● ● — ● ● ● — ● — ● ● ● — ● ● ● — ● — ● ● ● — ●

近ごろ読んだ図書館の本



近ごろの大学図書館の話を開くと、すっかり様変わりしているようで、現場から離れて8年を経過した私は、どこか遠い世界の出来事と思えるようになりました。

図書館との接触は、調べごとがあれば宇治の市立図書館へ行く程度です。たいていは資料の古さと少なさ、職員の専門性の程度にがっかりして帰ります。私が調べる程度のことは、どこかの大学図書館へ行けば必ず何らかの資料が見つかるに違いないことは分かっていますが、大学を離れてみると、大学までは遠いし、また、その敷居が意外に高く感じられて、大学図書館を利用するまでには至りません。数十年間、大学図書館で働いていた私ですらそうですから、特別の人たちを除いて、市井の人たちが大学図書館を利用するのは、まだ、かなりの心理的な距離があるだろうと感じています。

私は、これといった趣味を持ちませんので、暇つぶし程度に、近くの役所の一般行政事務を手伝っています。最初は、図書館とは畑違いの職場で、それまでにしたことのない経験をすることも面白からうと思ったのですが、最近では、金と権力に無縁で、毎日、本に触れることのできる、図書館の仕事に懐かしさを感じます。

最近、年のせいで本を読むスピードがめっきり遅くなり、読書力がすっかり落ちて、読書量も少なくなりました。だから、時々知人から贈られてく著書があると、嬉しいのですが、よほど関心を持てる主題でなければ、なかなか読めません。

そんな中で、昨年11月、『死』を学ぶ子どもたち（教育資料出版会 1998.12）という本が贈られてきました。著者は種村エイ子さん。その昔、京都府立総合資料館に勤務された人で、夫君の赴任に伴い鹿児島へ移りました。今は、鹿児島短期大学で図書館学の教鞭を執っています。種村さんは、進行性胃ガンによる胃全摘手術を受けた後、死を通して、子どもたちに「いのち」や「生きる」ことを語る、「死の授業」を多くの学校で続けています。それは、子どもたちの未来を見つめ、生きる力を育てることだ、といいます。中身は、読み聞かせやブックトークの実践記録です。私は、思わず引き込まれるように一息で読みました。詳しく紹介する紙幅がありませんが、そこには、公共、大学を問わず、図書館、図書館員の最も大切なものは何か語られていると感じました。

果たせるかな、その後、和光小学校の先生が書評の中で「本書を読み終えた私には二つの大きな宝物ができた。一つは、・・・エネルギー。もう一つは、三十冊以上にも及ぶ本のリスト」と評している（「赤旗」1999.3.1）。教育の専門家をして宝物を貰ったと感動させるような図書館員の営み、久しぶりにいいものを読ませてもらったと思いました。

近況を書け、ということなので近ごろ感じたことを書きました。実は、1960年代の前半、労働組合の機関誌に、トトカルチョをもじった「レタカルチョ」というコラムがあって、みんなで短文をリレーしたことがあります。いつの世も似たようなことを考えるものだ、懐かしく思い出しました。